

「水野氏論稿」 雑感

大野 保治

今年（04＝平成16年）、六月か七月頃だったろうか、奈良市居住で面識のない水野氏から手紙、そして電話を頂いた。その内容は前掲のようなものであった。

◇

◇

◇

まず、私の釈明からしておきたい。

―当該神社史の中で「神イザナギノ神、妹イザナミノ神、二柱嫁キ玉ヒテ八百万ノ神ヲ生ミ給ヒテ、麻那弟子ニ火結ノ神ヲ生ミ給フ」の麻那弟子に付した私の振り仮名（通称、ルビ）の「まなでし」の件である。

じつは去る四年前の二〇〇〇（平成十二）年春に鶴見地区の氏神様「火男火賣神社」創立千五百拾年祭が举行された。その前年の夏のころ氏子総代会の席で記念誌刊行が決定した。執筆を引き受けるにあたり、私は遅疑逡巡した。というのも私の専門（法社会学）外の領域で調査研究の期間も短かったからである。加えて、式典が翌三月の春祭と確定しているため、最終校正の折に神名や難語にルビを振るのに急いだためのミスであった。

「麻那弟子」―これは、古代日本には固有の文字がなく、

中国伝来の漢字を借りて表記に用いた、いわゆる「万葉仮名」と思われる。マナは称美・親愛の意を表わす接頭語であり、現在の漢字では「愛」や「親」が当てられることは承知していた。記念誌執筆時にイメージアップした類似の用語は「マナ娘」で、その含意するところは「目に入れても痛くないほど可愛い最愛の娘」であろう。これから類推して「弟子」は、最愛の弟か男の子か、と理解していた。ところが最後の校正時に付したルビが、この「でし」だったのである。

ところで「弟子」の語意は、弟や子のように師に従ふ者、教え子、門弟の意、と辞典（広辞苑）に記されている。この文字の歴史的沿革は、室町期から徳川時代に入って社会階層が分化して社会関係や社会的地位が上下の身分等に関連して発生したものではないか、と考える（言語学に疎い私には断言できないが）。

私の理解したマナ弟子は、内容的には「オトゴ」であり、辞典にも「弟子・乙子」として「末に生れた子、末子、おとこのこ」と出ている。ちなみに「乙子月」は陰暦十二月の異称、「乙子の祝い」は十二月一日（旧暦）に行う祝いで、この日餅を食べば水難をまぬがれると説かれている。平安時代のおもに貴族の行事であったのだろうか。

今一つ、水野氏指摘の「……御体ヨリ成り、天ノ香具山ヲ初メ……」の箇所も読点とちをつけるべきでなく、「御体ヨリ成ル天ノ香具山……」として形容句（修飾語）に解すべきであり、この点もまた私の浅学によるものでウツカリミスであった。以上の二点について、ご了承を願いたい。

◇ ◇ ◇

先般、旧盆のあと九月中旬、台風のさなか、私（大野）が頼んでいた関連資料を送って戴いた。九州を除き全国にある歴史研究会を方法上指導していると考えられる古田教授の名著『古代史の十字路―万葉批判』（東洋書林）と『新・古代学第四集』（新泉社）中の森嶋通夫氏（著名な経済学者、昨年死去）と古田氏の対談で「天の香具山、別府鶴見岳説」にかかわる部分のコピーであった。かなり詳細だが、森嶋教授は歴史学が専門でなく経済学・数学で永らくロンドン大学に留まり、何年前にはノーベル賞候補に上ったようだ。したがって古田氏との対談では、専ら聞き役にまわっている。

それはさて置き、古田武彦教授の来歴と「古田史学の会」等の活動情況を紹介しておきたい。

古田武彦 福島県生まれ、旧制広島高校（現広島大学）から

東北大学日本思想史科卒。昭和薬科大学で歴史学講座を担当、

定年。定年後は、向日市居住。著作は多数で『邪馬台国』はなかった』『失われた九州王朝』『盗まれた神話』『倭人伝を徹底して読む』（以上、朝日（新聞）文庫）、『古代は沈黙せず』『古代史徹底論争』（編著）『邪馬台国徹底論争（全三巻）』（以上新泉社）、その他。

古田武彦氏の読者の会活動 △古田史学の会は全国組織で

代表者 水野孝夫（奈良市富雄泉ヶ丘11―20）

事務局 古賀達也方（京都市上京区河原町通今出川上る）

各地に地域の会（支部）がある（北海道〓札幌市、仙台、東

海〓名古屋市、関西〓奈良市、四国〓北条市、九州〓福岡市）。

他に近似した読者の会がある。

△ 市民古代史の会・青森（青森市）△古田武彦と古代史を

研究する会（略称・東京古田会）（東京都文京区）、△多元的

古代研究会・関東（さいたま市）など。それぞれに代表者

（会長）と事務局が置かれている。

◇ ◇ ◇

『万葉集』の解説（角川書店編『万葉集』巻末）

『万葉集』は現存する最古の歌集、全二〇巻。

歌数は約四五四〇首、ほとんどが短歌（五七五、七七）である。

長歌は約二六〇首。五七調を反復し、終末を多く七七で結び、普通はその後に「反歌」をとまなうものである。その他、せとうか施頭歌は六〇首。これは五七七と片歌を反復した六句体で、本来民謡的な謡い物が多い。少数ながら、ぶつそくせつか仏足石歌と呼ばれるものもあり、これは仏の足をした歌碑に彫られた歌である。たとえば奈良薬師寺のそれは二一首がある。

時代は雄略天皇と磐姫皇后（仁徳天皇の皇后）の伝承歌を除くと、舒明天皇（六二九〜六四一）の時代から天平宝字三年（七五九）まで、約一三〇年間の歌が集められている。作者の階層は、天皇から一般庶民までと幅広い。成立事情は複雑で、不明な点が多いとされている。

ところで重要なのは、「文字」の問題である。日本には古代固有の文字はなく、中国からの漢字を借りて表記に用いた。これが「万葉仮名」と呼ばれるものである。たとえば志貴皇子しきのみの歌（一四一八番）は、次のように書かれている。

石走る 垂水の上のさわらびの
いわばし 萌え出づる春と なりにけるかも

〈石走 垂水之上乃 左和良妣乃 毛要出春介 成来鴨〉

（万葉仮名）

奈良の水野氏より、このような手紙を頂いた折、戸惑いを覚えた。失礼な言葉ながら「捨てたものではないな」と。

私は、威厳のある鶴見岳の麓で生れ育ち、朝夕ながめながら満八十歳まで生き延びた。戦前の別府中学（現鶴見丘高校）の校歌にも歌われ、その同窓会も「鶴嶺会」である。別府と関西（神戸・大阪―四国）を結び別府航路も明治五年頃から開かれており、現在も利用する人が多い。私も夜の旅には汽車（当時）でなく、よく船を利用した。

四国の瀬戸内海を経て豊後水道で少し揺れ、佐賀関から別府湾に入り、しばらくすると、当該山が見え「わが故郷が一番いいな」と感じたものだ。県外に出た人も、故郷に帰る時によく船旅を利用する人も多く、同じような感想を聞いた。

『万葉集』には由布（木綿）岳の歌も出ており、『豊後風土記』には景行天皇が熊襲征服の折、国東半島を船で回り、恐らく湯の湧く浜脇の津に船を繋ぎ、鶴見岳に登ったことも記載されている。現在でも朝見川河口ではカモメの群（多いときは二、三百羽）の翔ぶ姿が見られる。

問題提起された水野氏等の「仮説」に対して、歴史学者や文学者にもよく調査研究して頂き「郷土別府のロマン」を追求してみたい。